

宮臨技学術部	研修会報告書	平成 26 年度	作成者 高崎 健司
研修会名	平成 25 年度精度管理病理部門 フォローアップ研修会		
担当分野	病理部門		
開催日時	平成 26 年 5 月 24 日 (土) 14 : 00 ~ 17 : 00		
開催会場	宮城県立こども病院 愛子ホール		
参加人数	会員 36 名、非会員 2 名、合計 38 名		
研修内容 (感想を含 めて)	<p>1. 平成 25 年度病理部門精度管理調査報告・検討 演者：東北薬科大学病院 佐藤正樹技師 宮城県立こども病院 高崎健司技師</p> <p>高崎技師から平成 25 年度病理部門精度管理調査報告として昨年行われた病理部門の精度管理項目「エラスチカ・マッソン染色」について、宮臨技の報告会では時間の都合上詳しく説明できなかった詳細な分析を報告された。</p> <p>佐藤技師から弾性線維の染色性について脱パラフィン、媒染、染色時間、試薬の開封からの経過日数とレゾルシン・フクシンの染色濃度、バックグラウンドの共染について検討内容が報告された。脱パラフィン不足によって生じる染色ムラやレゾルシンフクシン液は開封後 1 ヶ月程で pH の変化による劣化で弾性線維以外に共染をおこすなど、試薬の品質管理の重要性が示された。</p> <p>高崎技師からは筋細胞、膠原線維の染色性についての検討が報告された。今回の精度管理で評価の悪かった染色方法を基に媒染にも用いられるブアン液の反応時間や、反応温度約 56℃と約 37℃における筋細胞、膠原線維の染色性の違いを示し、今回の症例では 37℃で 30 分程度の媒染を行う事で 3%重クロム酸カリウムの 60℃で 1 時間の媒染を行った時とほとんど同様の染色性が得られる事がわかった。またポンソーフクシンとオレンジ G の染色時間、組成の違いにおける筋細胞の染色性の変化が示された。これらの事を理解してエラスチカ・マッソン染色を行う事が重要だと考えた。</p> <p>2. 病理組織診断におけるエラスチカ・マッソン染色の有用性 演者：仙台市立病院 病理診断科 渋谷里絵 先生</p> <p>渋谷先生には平成 25 年度病理部門精度管理調査における総評を述べていただきどう言った標本が見やすかったかの意見を聞くことが</p>		

	<p>できた。また他県で用いられるエラスチカ・ワンギーソン染色標本との比較ではワンギーソン染色では核の染色が鉄ヘマトキシリンを使用され核所見は見やすいが膠原線維と筋細胞の染色性がともに暖色であるのに対しエラスチカ・マッソン染色では核が筋細胞と同じ赤色で核所見は観察しにくい。膠原線維は緑色、筋細胞は赤といったコントラストが良い。目的は核ではないので、エラスチカ・マッソン染色の方が診断しやすいとのことであった。さらにエラスチカ・マッソン染色を依頼する目的、との比較を講演いただいた。エラスチカ・マッソン染色での肝硬変における膠原線維の増生と進行期の診断や癌の脈管侵襲の診断血管、肺、心臓の病変の観察ポイントが大変勉強になった。</p> <p>3. 腎生検標本作製のポイント ～エラスチカ・マッソン (EM) 染色とマッソン・トリクローム (MT) 染色の違い 演者：JCHO仙台病院 病理部 伊藤佳子 技師</p> <p>伊藤技師には腎生検で用いられるHE染色、PAS染色、PAM染色、マッソン・トリクローム染色、エラスチカ・マッソン染色標本の目的の違いとそれに見合った標本作製するためにJCHO仙台病院で行われている手技、良いマッソン・トリクローム染色標本作製するための検討について講演いただいた。エラスチカ・マッソン染色とマッソン・トリクローム染色は目的として膠原線維や免疫複合体沈着の染色があげられるが、腎生検標本においては核を観察して細胞の同定を行い、メサンギウム細胞の増生やため鉄ヘマトキシリンをマッソン・トリクローム染色が好まれる事がわかった。標本作製には検体採取、それぞれの染色にあった固定、薄切の厚さ、染色とすべてにおいて正確に行わなければならない事があらためて理解されたと考える。</p> <p>光学顕微鏡標本で電子顕微鏡標本に負けない標本作製を常に目指しているとの言葉が印象的であった。</p>
<p>総括</p>	<p>大変活発な研修会が開催できた。県の報告会の補足のため、また精度管理事業自体が大変貴重な研修会の資料となりうるため、やはりフォローアップ研修会は来年度以降も継続していかなければならないと考えた。会の運営に携わった実務委員をはじめ講師の先生方にも感謝いたします。</p>

